
帳

かさのきず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
帳

【コード】
N7613H

【作者名】
かさのきず

【あらすじ】
僕と彼女の間には、帳がある。声も届くし、想いも届く。だけれど決して触れあえない。

(前書き)

おはようございます。……こんにちは？ それともこんばんは？
かさのきずです。

「帳」と「手紙」というワードで書いてみました。
楽しいかどうかは微妙ですが、読んでってくれると嬉しいです。

僕と彼女の間には、どれだけの距離があるのだろう。

そう遠くはないといいけど、もしかしたら何キロメートルも離れているのかもしれない。

ただ一つわかるのは、僕たちは絶対に触れあえないことだけだった。

夜の帳が下りる。っていう表現を聞いたことがないだろうか。

夜になる。という意味の文学的な表現だ。

そして、この場合の帳というのは戸の代わりとなるもので、部屋を仕切るカーテンとかを示す。

たぶん、僕と彼女の間にも帳がある。

声も届き、想いも伝わる。けれど、けっして触れあえない。

そんな恋人同士って僕らだけだと思う。遠距離恋愛だって、会いに行こうと思えば会えるじゃないか。

僕らは、それすらもできないのだ。

また、彼女からの手紙が来た。

最新式のボイス付き。

僕はそれを再生する。

「こんにちは。……おはよう？ それともこんばんは？
由香です。」

手紙の返事ありがとう。いつまでも、こうしていきたい反面、少しさみしく思います。

……なんでこんなことになっちゃったのかなあ。

それでね……」

合成音声なんかじゃない。たしかに由香の声だ。

今でも、彼女の声は鮮明に記憶していた。

僕はすぐに部屋に戻って、まとめて買っておいたボイス付きの八ガキを取り出す。

時計を見て、僕は書き始めた。

「こっちはこんにちは。だよ。

知ってる？ 午前十時から、もうこんにちはを使うんだ。

そっちはこんにちは？ ……おはよう？ それともこんばんは？」

ポストに手紙を落とすと、カタンと音が鳴った。

今どき、年賀状とかでならともかく、手紙を使う人なんかいないって話だ。

帰る途中、学校の前を通る。

ちょうど昼休みの時間で、校庭には数人の生徒がゴールを出してバスケをやっていた。まだ昼休みが始まって十分ほどだというのに、早い。早弁でもしてたのだろうか。

あれから、もう一週間も過ぎた。

もう、学校へ行ってもいい頃かもしれない。

学校に行つてないことを書くと、由香はとても心配していた。

「私のせいかな？」
って。

本当は、僕が悪いのだ。僕が弱いせいなんだ。

由香の死に、耐えられない僕が。

学校に背を向けて歩きながら僕は思う。

明日の手紙には、何を書こうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7613h/>

帳

2010年10月11日11時05分発行